

---

# **死者多数**

結城陸空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死者多数

### 【NNコード】

N4971C

### 【作者名】

結城陸空

### 【あらすじ】

私はある黒い力を持つている。私は、人の死を見ることができるのだ。

私は街を歩くのが苦手だ。街を歩くと嫌なものを目にしてしまう。

私が嫌なもの、それは人間だ。ただ人間自体が嫌いなわけではない。私に与えられた特異な能力。人の死を判別することができる。これから死ぬ人間が分かるのだ。これから死ぬ人間は、顔が黒く塗りつぶされ顔を見ることができなくなる。街を歩くとそれを多く目撃する。これから死ぬ人が分かるのだ。

実際に人が死ぬ現場に遭遇したことも何度もある。だから街を歩きたくない。とは言つても私は独り身だ。食べ物がなければ死んでしまうし、生活に必要なものを買出しにもいかなければならぬ。嫌でも外にでなくてはならない。だから、私は、外に出て顔を黒く塗りつぶされているこれから死ぬ人間を見ても、見て見ぬ振りをする。大抵の人間は私とは関係のないひとだし、関わるのもごめんだ。

私がこの能力で辛かつたのは仲の良かつた友達の顔が、黒く塗りつぶされていたことだ。でもだからってあなたはこれから死ぬよなんて言えるはずがない。私は顔が黒く塗りつぶされていることを伝えずに友達と別れた。その帰り道友達は事故に遭つて死んだ。

なぜ私がこんな能力を持つているのかは分からぬ。こんな能力役に立つことなんてないのに。ただ私に恐怖を与えるだけ。いくつになつても決して慣れることがない。これから死ぬ人間はまさか自分が死ぬなんて思つてはいない。だから、みんな普通に生活している。

私も同じ、普通に生活をしている。ただ、出来る限り必要最低限

でしか外を出歩かない。一人でいる時は、この能力を決して見ることがないからだ。

そんな私は、今日も何気なくテレビを見ている。テレビと言つても映画とかドラマだが。こういう録画番組の場合リアルタイムではないため、見ても顔が黒く塗りつぶされていることはないから安心して見れるのだ。そんな私だが、ふと偶然テレビのニュースを見てしまった。その画面を見た瞬間私は凍りついた。レポーターの顔が黒く塗りつぶされている。私は動搖しながらもテレビを消した。

テレビの内容まで見る余裕はなかつた。ただもうすぐあのレポーターは死ぬそれだけは確実だつた。テレビを見て動搖してしまった私だが、買い物にいかなくてはならない。私は、玄関を出て、車を出して外にでた。

さすがに外に出る時は黒い顔を見るのを我慢するしかない。目を背けることぐらいしか私に出来ることはないのだけど。

今日は人が多いせいかやけに黒い顔を目撃する。みんなどんな死に方をするのかは知らないけれど。私は黒い顔から必死に目を逸らし、買い物をしている。

買い物をしている時に偶然目撃した親子、親子共々黒い顔をしている。二人とも、車に乗り、私の前を走行する。もしかしてこの親子はこれから事故にあって死ぬのではないか。そんなことが私の頭を過ぎるわいそう。

買い物を終えた私は再び車に乗る、そこに先ほどの親子が現れた。二人とも、車に乗り、私の前を走行する。もしかしてこの親子はこれから事故にあって死ぬのではないか。そんなことが私の頭を過ぎつた。

そして、それは目の前で現実になつた。目の前で対面事故が起つたのだ。親子の乗つた車はそのまま弾き飛ばされ、私の車の側面に衝突した。これでは関わらないわけにはいかない。私は仕方がなく車を降りた。すると、車の中から、泣き声がする。親は死んでいるようだったが、子供はまだ生きているようだ。

この時、私は始めて動いた。必死になつて子供を車の中から救出する。幸いなことに子供のほうは大した外傷もなく、車の隙間に挟まれていたため容易に救出することが出来た。

そして、私はこの時悟つた。

私の能力は人を助けるためにあるのだと、もしあのまま、私が助けにいかなければ、子供は死んでいただろう。私の特異な能力は人の死を判別する、これから死ぬ人が分かる。そんな私だからできること、それは死ぬ前に助け出すこと。私のこの能力は決して私の恐怖を与えるのが目的ではなかつた。人を助けるために幸せにするためのもの。偶然とはいえ実際に私はこの能力により子供を助けだすことに成功した。子供の顔も普通に戻つてゐるはずだ。そして、私は、子供の顔を見た。

子供の顔は黒く塗りつぶされたままだつた。その光景が信じられない。泣いてはいるものの、死ぬようなことは特に見受けれらない。

周りに事故を目撃して人が集まつてくる。私は泣いている子供の手を、ギュッと握りながら、周りを見渡した。全員が、顔を黒く塗りつぶされている。誰一人、普通の顔の人はいない。みんな顔を塗りつぶされている。

そういうや、今日はやけに黒い顔の人間を見た。そして、外にいる人も凄く多かった。よく考えれば今、目の前で事故にあつた車もの凄く急いでいたような。

私はふと、車の窓に映る自分の顔を見た。私は、その瞬間震えが止まらなかつた。

私の顔は黒く塗りつぶされていた。私も含め、ここにいる人全員が、黒い顔をしている。周りはざわついている。野次馬の声が耳に入つてくる。なにやら、意味のないこととか、仕方がないとかそんなことが聞こえてくる。周りの言つている言葉の意味が理解できない。すると私の手を握つている子供が泣きながら叫んだ。

「ママア、どこも逃げられないよーー」

逃げる。意味が分からぬ。どうして。なぜ。この親子も逃げていたのか。なにから。

そんな時私の耳に全ての真実を告げる言葉が飛んできた。それは事故を起こした車からのラジオだつた。

『本日8月15日。核は、全世界に放たれました。日本に着弾する核の数は1000を超えており、逃げ場はありません。これが最後の放送となります。みなさまのご冥福をお祈り致します』

その放送を聞いて全てを理解した。あのレポーターが黒い顔だったのも、やけに黒い顔を見るのも、子供を助けても黒い顔だったのも、私が黒い顔をしてたのも。そういうことだつたんだ。

そして私は空を見た。空には一面を覆いつくすほどの中ミサイルが飛び交っている。こんな終焉なら、私の能力が役に立つことはない。死ぬということを知つていよつと知らなかろつと同じこと。

そして、地球の生物は紅い閃光と共に滅亡の時を……迎えた。

死者 67億5823万2328人。

了

(後書き)

いかがでしたでしょうか。ありきたりな話かも知れませんが感想などいただけすると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4971c/>

---

死者多数

2010年10月31日03時12分発行